

クジラの公式とコーパスの相性

深谷 輝彦*

A Corpus-based Approach to the Construction of
No More Than + Comparative Clause

Teruhiko FUKAYA

0. はじめに

日本の学習英文法には、伝統的に「クジラの公式」と呼ばれる構文がある。これは、

- (1) A whale is no more a fish than a horse is.

という例文で代表される構文で、〈A is no more B than C is D〉とスキーマ化できる。そしてその意味は、「AがBでないのはCがDでないのと同じ」とされる。この構文の特徴を綿貫(2000: 372-3)に従って整理しておく。

- (2) a. この構文では「AがBではない」ということを言うために、常識的にまたは文脈から $C \neq D$ とわかる例を引き合いに出す。
 b. $A \neq B$ および $C \neq D$ と両方とも否定している。
 c. no more のすぐ後には名詞句に加えて、形容詞句、副詞句、動詞句、前置詞句などが生起する。
 d. 〈no more ~ than ...〉の変種として 〈not any ~ than ...〉という構文もある。

現在でも多くの英和辞典が(1)の例文を使い、「クジラの公式」文を説明する。意味関係が複雑であるせいか、学習英文法では必ずとりあげる構文である。

本稿では、(2a)の記述に注目し、「常識的にまたは文脈から $C \neq D$ とわかる例」とは具体的にどういうことか、現代英語コーパス *British National Corpus* からの用例をもとに英語事実を観察する。その上で、この構文に特有の語彙関係を明らかにする。「クジラの公式」として構文扱いすることに賛成するけれども、この構文に現れる語彙関係はあまり議論されていない。そして語彙関係を調査するには、コーパスが提供する豊富な用例が不可

* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

欠である。その意味で、「クジラの公式」とコーパスはなかなか相性がいい。結論として、この構文〈A is no more B than C is D〉の中で、AからのDの語彙は緊密なネットワークを形成していることを導き出す。つまり構文と語彙の深い関係を例証する作業を行う。

1. 先行研究

英英辞典の記述から始める。まず最新のLDOCE4 (2003)はこの構文の意味を次のように定義する。

(3) **no more ... than**

used to emphasize that someone or something does not have a particular quality or would not do something *He's no more fit to be a priest than I am!*

「人または物がある性質を持っていないか、ある行動をとらない点を強調する。」形こそ比較構文ながら、意味としては否定を強調する構文である点がはっきりと謳われている。次に、『ウィズダム英和辞典』(2003)は

(4) **no more ... than ... = not ... any more than ...**

... でないと同様に ... でない, ... でないのは ... (でない) と同様である。

(than の後には通例自明の事柄が現れる)

I can *no more* play the piano *than* speak Latin.

He is *no more* mad *than* you are.

という項目を *more* の中に立てている。(3)に加えるべき情報としては、括弧内にある *than* に後続する要素に関する制約である。「通例自明の事柄」とは英語の中でどのように実現されるか、非常に興味を覚える。

語法書、文法書からこの構文に関する記述をさらに拾うこととする。綿貫、淀縄 & Petersen (1994: 214-5) は、Jespersen の MEG II を基に次の二文を比較する。

(5) a. The gospel is not more true than what I tell you.

b. The gospel is no more true than what I tell you.

(5a) では、the gospel も what I tell you も真実である。他方 (5b) に移ると、両方ともいふそだということになる。

次に Huddleston and Pullum (2002: 1133) は、当該の文が比較構文か否定構文かあいまいな時があるという。

(6) This prospect did not please Mrs King any more than did the possibility that her daughter might marry a Bohemian.

比較構文と解釈すれば、the prospect よりも the marriage のほうを Mrs King がうれしいと思

う度合いが高い，となる。否定構文だとすると，両方ともに Mrs King はよしとしないという読みになる。そして than 以下の従属節が明らかにうそであれば，その結果，否定構文解釈が優先されることになる。すなわち，

(7) Where the subordinate clause expresses an obviously false proposition the rhetorical effect is to emphasise the negative: ...

(7)の前半部分が，コーパスからの資料を整理する際に，大切な指針となってくれるだろう。渡辺（2000: 130）も Huddleston and Pullum と同じ問題を考えている。例えば，

(8) He (= Fries) used no more of the professional terminology of linguistics than he felt absolutely necessary.

一見したところ「クジラの公式」のようであるが，実際には比較構文で「フリーズは絶対に必要だと考えるのではなくては，言語学の専門的術語を使用しなかった。」という意味である。no more の否定のスコープは than 以下まで及ばず，かつ than 以下は実現された事柄であり，決して「フリーズは全体に必要なと感じなかった。」という意味ではない。類例をコーパスから引用しておく。

- (9) a. There is surely no more important right in society than the right to read.
 b. We can do no more for the time being, then than acknowledge that a refined version of associative theory might be capable of ...
 c. I can suggest no more precise test than that.
 d. ... you'll probably need no more equipment than a basic word processing system.

例えば (9a) は，there 構文と no more ... than を組み合わせて一つの構文を形成している。その証拠に，British National Corpus に there is no more ... than という連鎖が 86 例も実現している。

2. コーパスからの用例分析

以下では British National Corpus から収集した 250 例の「クジラの公式」文を分類した結果を示す。no more A than B という構文の A と B の関係を基に次の 6 種類が得られる。

(10)

| 時間の前後 | 有名な人，物，事件 | 反対語関係 | 同類での比較 | 意外な比較 | 話し手・聞き手 | その他 |
|-------|-----------|-------|--------|-------|---------|------|
| 27 例 | 21 例 | 40 例 | 50 例 | 64 例 | 26 例 | 22 例 |

個別の議論は後半に譲るとしても，「クジラの公式」文が非常に限られた範疇の意味関係により成立していることは，注目に値する。先行研究に出てきた「常識的にまたは文

脈から $C \neq D$ と分かる例」 「*than* の後には通例自明の事柄が現れる」 “an obviously false proposition” の具体的内容が(10)である。常識的に誰にも知られており、かつその内容が否定命題を形成するとき、それらはたかだか6種類の関係に収束するという結果を得たといえる。そして繰り返すべきは、no more A than B という構文が上のいずれかの意味関係を形成する語彙の選択と結びついている点である。

2.1 時間の前後

主節に現在または過去、*than* 以下の従属節には過去または過去完了という配置で、この「クジラの公式」文は時間関係を作る。主節が過去で、*than* 以下に現在という時間配置はまれである。具体例をあげてみよう。

- (11) a. ‘I am still very sad that to the best of my knowledge there are no more nurses on those wards than there were when I was dismissed.’
 b. The present system is no more comprehensible to the public in this respect than was its predecessor.
 c. The prohibition of cannabis is no more effective now than the prohibition of alcohol has been in the past.

(11a) では、現在と過去で看護師の存在を否定している。過去を示すマーカーとしては、*than* 以下の *be* 動詞過去形に *when* 副詞節が結びついている。(11b) では時制標識に加えて、語彙レベルで *predecessor* と過去を表示している。(11c) の *in the past* も現在時制との対比に貢献している。

than 以下に動詞をとらずに、*before* や *ago* で時間差を示す場合も多い。

- (12) a. The proposed reform leaves councils no more ‘accountable’ than before.
 b. She spends no more on clothes than 12 months ago and ...

現在よりは確定度が高い過去、あるいはそれ以前の時間を *than* 句や節に置くことで、自明の事柄が *than* に後続するという条件を満たすことができる。言い換えれば、自明の事柄の一形態は、時間的により古い段階で起きた事柄であると言える。

2.2 有名な人、物、事件

誰もが知っている人、物、事件を *than* 以下に置く手法もよく用いられる。有名であるということから、歴史上の人、物、事件でもよいし、現在有名な事柄でも全くかまわない。

- (13) a. Attlee, however, was no more anxious than Churchill to actually fight the Germans.
 b. Sampson, of course, has no more claim to authority on pedagogic matters than Chomsky does.
 c. It was also, one must remember, a situation of continuing revolution which had no more ended in August 1945 than the French revolution had in July 1789.

(13a) の Attlee と Churchill は同時代の政治家であり、(11)のような時間的ずれはない。2人のうち知名度の高い Churchill ならばクジラ構文の *than* 節にはもってこいである。(13a)と同様に、(13b)の2人も現在活躍中の現役の言語学者である。Sampson の説明をするのに、一般人にも名前が広まっている Chomsky を *than* 以下で使い、比較の基準としている。(11)のパターンに近いのが (13c) である。revolution と言えばフランスという連想が成り立つので、そのフランスを *than* の従属節で活用している。

「オズの魔法使い」という映画を利用した「クジラの公式」文が二つあるので検討しておこう。

- (14) a. ... most children and adults enjoy Disneyland, and the movie is no more garish than The Wizard of Oz.
b. ... a leader who, despite all appearances, put no more of his substance into government than the man behind the curtain in the Wizard of Oz.

(14a) の場合、古典的映画である「オズの魔法使い」を基準にして現在のディズニー映画を比べている。ところが (14b) になると、映画そのものでなく、その登場人物の一人と政治家を比較し、共通点を見いだしている。繰り返して述べているように、*than* 節は ‘an obviously false proposition’ という条件が科せられているため、普通の比較文では現れないような意外性の高い基準が設けられることが多い。

2.3 反対語関係

第三のグループでは、*than* をはさんで反対語関係が生まれる。このタイプのクジラ文はかなりの高頻度で、全体の2割弱を占める。

- (15) a. Dirty faces are no more prone to spots than clean faces, say dermatologists.
b. God is no more an object inside the world than an object outside it.
c. Progress or improvement is no more likely than decline: ...

(15a) を例にとる。顔の清潔度というスケールを考えると、清潔度が最も高い *clean faces* がニキビになりにくいというのは常識的であろう。他方、清潔度が一番低い *dirty faces* がニキビになりにくいというのは意外で、情報価値が高い。このようにスケールの両極に同時に否定の網をかぶせているのが、(15)の例文群である。

反対語関係に基づく「クジラの公式」文が構文の意味を作り出す例をみておく。

- (15) ... when Charles Darwin published *The Origin of Species*, he had no more evidence in support of his theory than did the creationists ...

(14)とは異なり、反対語が文に含まれていない。すると *he* と *creationists* をペアと想定し、「創造論者」の反対語である「進化論者」という意味を *he* に持たせることになる。*he* 自体に「進化論者」という意味があると主張するのではなく、構文から「創造論者」の反対語「進化

論者」が he と結びつくと考えたい。

2.4 同類での比較

同じ分類に属する語句を用いて「クジラの公式」文を作ること多い。但し、than 以下には「自明の事柄」を持つてくるという条件は維持する。

- (16) a. Environmental groups have welcomed them (= electric buses), but say that they're no more sophisticated than milk floats.
 b. My German is no more advanced than my Portuguese.
 c. Precise dating of events is no more necessary than precise locations.

electric buses と milk floats, my German と my Portuguese, precise dating と precise locations はそれぞれ同一名詞グループに入れることができる。また、性能やカッコよりも実用性が第一のミルク配達車、習う順番が遅いと予測されるポルトガル語、必要度がすこし落ちる場所情報、などはまさに常識の範囲以内である。

同じ範疇の名詞を比較する時でも、than の後の名詞は「自明」という条件により、まさに日常生活の一場面を取り入れているのが(17)である。

- (17) a. For him, the task was no more onerous than putting out the wheely bin on Monday.
 b. James Dewer argues that smoking cannabis should be no more criminal than watching TV.

「月曜日に車輪付きゴミ箱をだすこと」≠onerous や「テレビをみること」≠criminal であることは余りに明々白々であるがゆえに、クジラ構文の主節の否定を強調するという機能が十分に果たされる。この用法は次の「意外な比較」でさらに発展する。

2.5 意外な比較

「クジラの公式」では、2.4 のように同じ仲間の語句を使う一方で、全く異なる分類同士でその構文を作ることもしばしばある。

- (18) a. ... she could no more keep house than fly to the moon ...
 b. But he was no more comfortable on the radio programme than he would have been on the real desert island.
 c. Asking whether God exists has no more meaning than a grunt or a belch.

家計と月旅行、ラジオ番組と砂漠の離れ小島、神の存在とゲップ、とお互い全く無関係で、どうみても尺度を共有していない。しかし、既述の通り、than に続く要素の否定性が強烈であるため、主節の否定が大いに助けられる。そしてこの意味こそ「クジラの公式」の存在理由なのである。

意外な比較の中で、下位グループが存在する。それは、動物、神、無生物の利用である。

- (19) a. I was no more alert to my environment than a sick animal and ...
b. ... I think that one must not show one's own, and that the artist must no more appear in his work than God does in nature.
c. 'I would no more look at her today than a bar of soap.'

(19a)では自分の警戒心のなさを「病気の動物」と結びつけている。(19b)の神の所業, (19c)の石けんともに、主節と結びつきが異常なため、結びつけたときの効果は大きい。そして(19)はそれぞれさらに多くの類例をコーパスから見つけることが容易である。

2.6 話し手や聞き手とのつながり

than 以下は「自明な事柄」という場合、誰が「自明な」人か、という問いを発してみる。答えは簡単で、話し言葉ならば、話し手が一番、聞き手が二番であろう。書き言葉ならば、書き手が一番、読み手が二番ということになる。そしてこれがコーパス・データに見事に反映されている。

- (20) a. He knew, and he knew that I knew, that James was no more Jewish than I was.
b. Miss H. is no more a lesbian than you are, ...

このように話し手、聞き手を否定の基準にするのは、「自明な事柄」の一表現方法である。話し言葉を例に取ると、話し手はある発話を行うときに、本人および聞き手について様々な想定をする。その中の一つとして、話者に関する否定的想定を利用すれば、「クジラの公式」を作るのはいとたやすい。他方、聞き手に関する否定的想定を発話で使えば、話し手と聞き手の共感を深める。

3. まとめ

小論では、いわゆる「クジラの公式」と呼ばれる構文について、コーパスから大量のデータを集め、この構文の特徴づける試みを行った。なかでも no more A than B の A と B がどういう関係を有しているか、明らかにした。従来からある「than 以下には自明な事柄がくる。」という性格付けを詳細に検討し、それを6種類の下位グループに分類した。その結果、「自明の事柄」とは1. 時間の経過による比較 2. 有名な人、物、事件との比較 3. 反対語を利用した比較 4. 同じ仲間の語句との比較 5. 意外な比較 6. 話し手、聞き手との比較であると、その中身を整理することに成功した。

参考文献

- Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
綿貫陽 (2000) 『徹底例解ロイヤル英文法』東京：旺文社
綿貫陽・淀縄光洋・M. F. Petersen (1994) 『教師のためのロイヤル英文法』東京：旺文社

深 谷 輝 彦

参考辞書

井上永幸・赤野一郎（2003）『ウイズダム英和辞典』東京：三省堂

Summers, D. (dir.) (2003) *Longman Dictionary of Contemporary English*. Harlow: Pearson Education.

[LDOCE4]